

The Fairy Star Stories

2005 - 2007 May

created by M.Z.Kinoko & Waka

ブッカーは立ち上がると、零の額にそっと右手を伸ばし、髪を撫で、髪と同じ色のヘッドクリスタルに指で触れた。零は軽く目を閉じる。黒曜石でできたようなそれが淡く光り、きらきらと、まるで歓喜するように輝いた。

「ジャムは得体の知れない強敵だ。……どうか、おまえたちの力を貸してくれ」

零は閉じていた瞼を開き、頷く。夜色の瞳が、騎士の金髪を反射して煌めいた。

「**イエス、マスター……マイ・ロード**」

(I: Stone of Steel Blue)

彰に抱かれながら零はブッカーの腕をおもう。傷だらけの体。体温が上がると薔薇色に染まる彼の肌。情欲に濡れた、しかしどこか悲しげな視線。熱く己の名を呼ぶ声。そのどれもが、今はない。

「**ずっと、いっしょに、いたいんだ**」

上手くゆけば、きっとブッカーは先に逝くだろう。ファティマの寿命は人のそれよりずっと長い。ブッカーを主と呼んで、零ははじめてそのことを恨んだ。共に生きる永遠を願った。

(I: Three Fairies -Akira-)

血のように、深く紅い衣。右袖に大きく特殊戦の紋章が、ブッカーの髪のような燃える黄金色の糸で縫い取られている。左肩から、特殊戦であることを示す闇色のピロードがたつぷりと流れていて、そこから腰に佩いた太刀がのぞいた。

「……**少佐、騎士みたいだ**」

真顔で、零が言う。

「零、おれは騎士なんだが」

(II: The Advent of the Faerie Queene)

「**おまえは、確かに変わったよ**。よく笑うようになったし、おれに正面から突っかかってくるようになったしな。出逢った頃のおまえはまるで、毛を逆立てた猫と同じだった。ああ、誤解するな。あの頃のおまえももちろんだが、おれは、今のおまえを」

愛している、といったブッカーの言葉に込められた熱に、零の眸が震えた。

(II: With or Without You)

零の指がパネルの上を踊るように滑る。次の行動とは即ち、攻撃の回避と、そして――

「**行くぞ、雪風!**」

ランヴァボンのスパッドが届くよりも一瞬早く、雪風の機体にはフルブーストが掛かり、襲い掛かる青い光剣の上を軽々と跳躍する姿は優美ですらあった。全力の打ち込みをさらりと流され、ブリューイは驚愕の声を上げた。

『このタイミングで躲すか! 雪風……!』

(III: Dancing with the Sunlit Knight)

「ちょうどいい。おれのいない間に欲しくなるようなことがあれば、こうやって紛わしたらいい」

「そんなの……なるはず……」

「**そうか? おれはきっと耐えられなくなる**。そうしたら――」

今のおまえの声や姿を思い出して、独りでするさ、と、ブッカーは腰が蕩けるかと思うほどの甘い低音で囁いた。

(III: Blood of Eden)

「… なぜ、マスターはぼくを捨ててしまわないのですか」

「どうしてお前はおれの言うことをきかない? 今回も、だった。どうしておれの面目を潰すようなことをする」

バーガディシュは質問を質問で返す。

「**ぼくはファティマです**。戦場で主に勝利させるようにできているのです」

「おれが倒れても譲らなければいけないことがあるんだ」

「それが、ぼくにはよくわからないのですマスター」

(III: Wandering Chevalier)

目を閉じ、横臥した男からの返事はない。待て、もう寝たのかと、床の上にこぼれ落ちる、少し傷んだ金髪を一束揃んで軽く引いてみても無反応だった。

「起きろよ、ブッカー少佐……」

あんたを運ぶのなんかご免だぞ、おれは」

規則正しい、深い呼吸の音。その音に零は、初めて雪風で出撃した時のことを――騎士としてのこの男を、彼の脈動を、その息遣いを、これ以上ないほど近くに感じた時のことを思い出していた。

(V: A Thousand Miles)

騎士としての高い能力を有し、雪風を制御するだけの力を備えた人間なら誰でも、自分は選んだのかも知れない。しかし、それだというなら、なおさら。(おれは、あんたでなければ、駄目だったんだよ――) 再びの長いキスの後、口唇を触れ合わせたま零は言った。

「**おれも雪風も、あんたの武器だ。だから**」

あんたの武器となるものの、全てを知ってくれ、と。

(I: Knight with Celeste Blue Eyes)

「そんなに、きつく囁むな……血が出ている」

ブッカーの指が、さらに紅く染まる唇に触れた。

「**おれはおまえを手放すつもりはない**。おまえがいやだといって逃げても、どこまでも追うつもりだ」

独占良くのあらわな声音、言葉に零の身が震える。恐怖でなく、主を失わなかったという安堵でもなく、それほどまでに目の前の男に強く思われているという幸福感がそうさせた。

(I: The Chivalries)

「ただの手合せではつまらんだろう。何か賭けないか、零」

零が目を丸くする。いきなり何を言い出すのかとでも言いたげな視線を寄越してくる。

「そうだな……よし。もしおれが勝ったら、おまえは金輪際おれのことを『少佐』と他人行儀に呼ぶなよ」

「じゃあ何て呼べばいい。『マスター』とでも呼んでやろうか?」

「おまえもくだわる奴だな……そうじゃない。『**ジャック**』と**呼べ。いいな**」

「……どうしてあんたがジャックになるんだ」

(II: In Your Eyes)

「少佐にはいさまの小さい頃の話、聞きたがらないですね。…もしかして、嫉妬?」

いひひ、と冗談めかして言ったつもりが、図星だったらしい。ブッカーは難しい顔をして押し黙ってからこういった。

「… おれは今の零に十分満足しているからな」

「**またまたあ! ほんと知りたいんでしょ**」

「別にそんなことは知らんでもいい。零が言い出さないことをわたしは根掘り葉掘り聞くような無粋な真似はせん」

(II: Cherry Shuffle)

「**レイ…光?**」

「**いいや、零は零だ**」

ここは、信じられないくらい綺麗なものがたくさんある。そうエディスは思った。話に聞いたとおりだ。妖精の名を持つ空の色は緑色、住む人もこんなに美しいのかと呆然とした。このとき、零がファティマであるという可能性をどうして考えなかったのかというと、頭部にクリスタルがなかったこともそうなのだが、ファティマとおもうにはあまりに彼の様子が自然であり、毅然としすぎていたからだ。

(III: Little Doctor and Fairy Brothers)

模擬戦の名を借りた決闘の結果は、表向き引き分けと処理されるだろう。負けではないけれども、あの時クーリィ准将が止めに入っていなかったら。ブッカーの大々的な告白に衝撃を受けたわけではない。零を強く望みながら、零の望みを叶えんがために、零が遠くになってしまう――零を連れ去るあの男の手助けを完遂してしまったことが、彰を強く強く落ち込ませた。

「**ぼく、なにやってんだろ**」

(III: Starving Crybaby)

「いつも言ってるだろう。恋人が美味そうにものを食ってるところを見て、幸せだと思わない男はいないものだ」

「……」

全く、この男は――

どういう神経をしていれば、こんなに臆面なく、こんな歯の浮くような台詞を吐けるものだろう。ほのかに頬が熱くなるのを感じて、咄嗟におれは別の対象に意識を向けようと努めた。

(IV: Loin de la Planete Feerique)

「**彰、おれは、選んだのではない。決めたんだ**」

にいさま、と彰が呟く。

「メイヴ… 雪風も知っている。彼女もジャックのことを必要としている。だから大丈夫だ。もし、おまえやエディスが案じているようなことになったのなら、そのときはおまえか元がジャックを斬って棄てればいい」

その時、誰も触れていないはずのメイヴ、雪風が、零に呼応するかの如くその身のうちに据えたイレーザ―エンジンをけたたましく咆哮させた。

(V: The Weaverbirds)